

# ハーバート・ハイドプリーム

—全米初のDV裁判を勝ち取ったサウスダコタ州弁護士物語—

A Story of Herbert Heidepriem—A South Dakota Local Lawyer Who Won the First Burning Bed Case in the U.S.—

佐々木 裕美 Yuumi SASAKI

## 概要

1968年12月11日未明、アメリカ合衆国サウスダコタ州で、眠っている男を同居の女がライフル銃で射殺するという事件が起きた。1969年5月、弁護士ハーブ・ハイドプリームは、この男を「狂暴で荒れ狂った残忍な男」と評し、女には身の危険を察知するのに十分な理由があり、この夜、彼女は差し迫った危険を感じた。それゆえこの殺人は「正当防衛」であると主張した。12人の地域住民からなる陪審は、裁判長を務めた判事も想定しなかった「無罪」の評決をくだし、この裁判は、知る人ぞ知る合衆国で最初のバーニングベッドの判例となった。

本稿は、現存する記録と人々の記憶をもとに、この事件の起きた場所と登場人物を描写することによって、ハイドプリームが女の無罪を勝ち取った背景を描こうとする試みである。

## キーワード

サウスダコタ州 South Dakota、ハーブ・ハイドプリーム Herbert Heidepriem、バーニングベッドの判例 Burning Bed Case、ヴァージル・アイキンズ Virgil Aikins、マリリン・フィリップス Marilyn Phillips

## 目次

- 1 はじめに
- 2 ハーブ・ハイドプリームとヴァージル・アイキンズとマリリン・フィリップス
- 3 ヴァージル・アイキンズ射殺事件概要
- 4 全米初のDV裁判
- 5 おわりに

### 1 はじめに

1948年11月25日、北海道大学キャンパス内と周辺で、二人の米兵が日本人十数人を殴打・強盗・殺人するという事件が起きた。第二次世界大戦後の占領時代のことであり、当時日本の警察組織は何もできなかったばかりか、新聞もこの事件をアメリカ人の仕業として大きく報道することはできなかった。二人の男は、札幌大通公園にしつらえられた教会を舞台に軍事裁判にかけられ、死刑の判決が下された。

それから20年後の1968年12月11日、米サウスダコタ州のスマールタウン、ミラー (Miller, SD)

近郊の農場で、一人の男が就寝中に同居中の女によって射殺されるという事件が起きた。男が無抵抗の状態での殺人であったにもかかわらず、全員が白人の陪審は、女に無罪の評決を言い渡した。DVを理由に、女の正当防衛を認めた米国裁判史上初の判決であった。

この二つの事件が、一人の弁護士ハーバート・ハイドプリーム(Herbert Heidepriem)によって結びつく。日本で死刑判決を受けた二人の米兵のうちの一人と、ミラー近郊の農場で女性に射殺された男は、同一人物であった。名前をヴァージル・アイキンズ

(Virgil Aikins)という。

本稿は、この二つの事件の裁判記録をもとに、周辺の人々の証言と残された資料から、全米で初めてDV裁判を勝ち取った弁護士ハーブ・ハイドプリームの物語を紡ぎ出そうとする試みである。

## 2 ハーブ・ハイドプリームとヴァージル・アイキンズとマリリン・フィリップス

1949年初夏のある日、ミラーの弁護士事務所(Heidepriem, Widmayer Zell & Golden, Attorneys at Law)に、一人のインディアン女性が嘆願書を持って現れた。サウスダコタ州にある9つのインディアン保留区のうちの一つ、クロウ・クリーク保留区(Crow Creek Reservation)のフォート・トンプソン(Ft. Thompson)からやってきた、部族判事(Tribal Judge)のヴィクトリア・アイキンズ(Victoria Aikins)であった。息子のヴァージルが、北海道の札幌というところで行われた軍事裁判で死刑判決を受けたという。<sup>(1)</sup> ヴィクトリアは、トルーマン大統領(President Harry S Truman)に刑の軽減を求める嘆願書を出すために署名を集めているというのだった。

ハイドプリームは快く署名した。それが、彼の、ヴァージルとの最初の関わりであった。それというのも、20年後に、彼はヴァージルを射殺した被告人マリリン・フィリップス(Marilyn Phyllips)の弁護士として法廷に立つことになるからである。ただし、ハイドプリームは一度も生きているヴァージルには対面していない。

そこで、まずこの物語の主軸となる弁護士ハーブ・ハイドプリームとヴァージル・アイキンズ、そしてマリリン・フィリップスについて、現存する記録<sup>(2)</sup>と人々の記憶<sup>(3)</sup>をもとに述べておきたい。

### 2.1 ハーブ・ハイドプリーム

#### 2.1.1) サウスダコタ州西部

1874年、サウスダコタ州西部のブラックヒルズ(Black Hills)で金鉱が見つかったことが公となり、一攫千金を求めて大勢の白人たちが同州に押し寄せた。<sup>(4)</sup> サウスダコタ州が、ダコタ準州から「州」に昇格するのは1898年のことであるから、まだブラックヒルズがインディアンの聖地であった頃のことである。<sup>(5)</sup>

数々の衝突の中でも、サウスダコタ州でスー族が

カスター將軍麾下の第七騎兵隊を殲滅した1876年のリトル・ビッグ・ホーンの戦いが、インディアンの、白人の侵入に対する強い抵抗としてよく知られている。

以下は、ハーブの父親エリック・ハイドプリーム(Eric Heidepriem)が書き残した「家族史」<sup>(6)</sup>に基づくものである。

#### 2.1.2) ドイツ系移民ハイドプリーム家のカスター定住

ハーブ・ハイドプリームの祖父は1850年2月2日にドイツ北部のプロイセン(Preussen)で生まれた。1871年、古い蒸気船に乗ってアメリカにやってきた移民であった。ニューヨークで2年間、家具職人として働くうちに、西部での金鉱発見の話を耳にして鉄道でコロラド州デンバーに向かった。2-3年をデンバーで過ごしたあと1876年の夏、幌馬車に乗り込み2週間かけてカスター(Custer, SD)に到着した。1877年のある日、4つの金塊を見つけるが、それが最初で最後の発見であった。1879年には、金を掘るのを諦めて家具職人として仕事を始めた。当時は棺も作ったため、いつのまにか葬儀屋の仕事もするようになっていた。1889年には、死体防腐処置の免許も取得している。

祖母は、1856年7月10日にドイツ西部ライン川沿いのジーゲン(Siegen)で生まれた。1882年にきょうだいでアメリカにやってきたが、教育がなく英語もできなかったために、金鉱町の下宿屋で働いていた。

祖父母は、1884年に結婚し、4人の子に恵まれた。1885年に長女、1887年に長男、1891年に次男、そして1893年4月11日にハーブの父親となる三男エリック(Eric)が生まれた。夫妻は葬儀屋とともに家具屋、金物屋で成功し、後には農場と牧場を所有するようになる。彼らが住んでいた当時のカスターは、ワイルド・ビル(Wild Bill)、カラミティ・ジェーン(Calamity Jane)、デッドウッド・ディック(Deadwood Dick)ら悪名高い西部のならず者が闊歩する開拓時代の鉱山町であった。

ハーブの父エリックは、カスターの高校を卒業後、サウスダコタ大学(University of South Dakota)に進学するが、在学中に父親が他界したため学業を中断し、カスターに戻った。後に彼は、カスター市長を5年間務めている。エリックは1919年に高校時代からの恋人ヴィヴィアン(Vivian)と結婚し、

二人の息子ハーバート (Herbert) とドナルド (Donald) をもうける。ヴィヴィアンは、多発性神経炎で1933年7月に亡くなり、1935年、エリックは、オハイオ州から結核の勉強をするためにサウスダコタ州のサナトリウムに来ていた看護学校卒の正規の看護師バーナディーン (Bernadine) と再婚した。バーナディーンはエリックより20歳年下で、23歳にして9歳と13歳の息子を持つことになった。

### 2.1.3) カスターからミラーへ

ハーブ・ハイドプリームは、1922年3月24日に生まれた。すでにドイツから移民した祖父母から数えて三世代目にあたり、この土地の旧家であり名士の家庭で、裕福で幸せな子ども時代を過ごしたと、大学時代の作文<sup>7)</sup>に書いている。その中で、10歳の時に母が病気になり、母方の伯母と一緒に住むようになったこと、母を亡くして寂しかったことなどを述べ、数年後に父が再婚した継母バーナディーンが、自分にとっての母となり、大きな影響力を持って自立と自信と誇りを与えてくれたと述べている。

サウスダコタ大学に入学後、第二次世界大戦に従軍し、ヨーロッパで膝を負傷して帰国、1948年、政治学と法学を修めたあと、教師をしていたロバータ・ネルソン (Roberta Nelson) と結婚し、ハンドカウンティ郡庁の所在地ミラーで、弁護士業を開始した。ハンドカウンティ郡他より選出州検事 (1951年-1954年)、州上院議員を5期 (1956年-1967年) 務め、その間に州議会検討委員会委員長 (1962年-1963年) も務めた。

1968年、それまで州上院内でも有力な共和党院内総務候補でもあったハイドプリームは、6月に行われた共和党予備選挙<sup>8)</sup>でまさかの敗北を喫し、弁護士業に勤しんでいた。そしてその年の12月11日、事件が起こった。

ハンドカウンティ郡 (Hand County) の庁舎から通りを隔てた一角に住んでいた彼は、裁判所の任命によってヴァージルを射殺した女性、マリリン・フィリップス (Marilyn Phillips) の弁護を引き受けることになる。

## 2.2 ヴァージル・アイキンズ

### 2.2.1) インディアンとしての誕生

ヴァージル・ロイド・アイキンズ (Virgil Lloyd Aikins) は、1928年11月11日、インディアン保留区のフォート・トンプスンで生まれた。今も残る

手書きの出生記録<sup>9)</sup>には、父はベン・アイキンズ (Ben Aikins, 27歳、White=白人、Highmore出身)、母はヴィクトリア・アシュレー (Victoria Ashley, 24歳、Red=インディアン、Native Indian) と肌の色の記載があり、ヴァージルはRedと分類されている。南部の黒人に対する人種差別と同様に、当時サウスダコタ州ではインディアンを「赤色人種」として公然と差別している。

ヴァージルの息子で現在州刑務所に服役中のウエイド・アイキンズ (Wade Aikins) <sup>10)</sup>によれば、ベンはアイルランド系の白人で、農場を営んでいた。ウエイドは、自らのアイデンティティを問う筆者のインタビューに答えて「白人とインディアンのどちらか一方とは思わない。両方の文化を持っていると思う。祖父母のところで育ったから」と述べている。ウエイドは6歳の誕生日の前に父親のヴァージルを亡くしたが、父親を射殺したマリリンについて「彼女は好人だった。(She was nice.)」と表現した。<sup>11)</sup>

### 2.2.2) 合衆国軍入隊、占領軍兵士として日本へ

ヴァージルは1946年2月12日、18歳で合衆国陸軍に入隊した。入隊前、ミラーの隣町ハイモアにいた時代のヴァージルを知る人は彼のことを、食料雑貨をよく届けてくれた"nice boy"だったと口を揃えてスコット・ハイドプリームに言ったという。その後日本に占領軍兵士として駐留、1948年10月13日頃、日本人女性との間に息子ロイド (Lloyd) が生まれているが、<sup>12)</sup>その直後の11月25日感謝祭の木曜日に別の駐留軍兵士と二人で札幌市内の北海道大学内および周辺で強盗・殺人・傷害事件を起こし、収監された。翌年1949年4月22日から札幌大通公園の教会で軍事裁判が開かれ、4月26日に死刑判決を受けた。<sup>13)</sup> 本稿の冒頭で触れたヴィクトリアの助命嘆願は、この死刑判決の報に接しての母親の行動であった。<sup>14)</sup>

死刑判決を受けたヴァージルは、翌1950年4月26日、トルーマン大統領の恩赦<sup>15)</sup>によって終身禁固に減刑され、1952年12月24日にカンザス州レヴンワース連邦刑務所 (USP Leavenworth, KS) に収監された。後に仮釈放されていったん故郷サウスダコタ州に戻ったが、1964年7月4日にライフルを持って車を運転して仮釈放取り消しの処分を受けている。この間に、アリス・メアリー・ニック (Alice Mary Nick) と結婚して離婚。次にジョセフィーヌ・

バッド・モカシン (Josephine Bad Moccasin) と結婚、前述のとおり 1962 年に二人目の息子ウエイドが誕生してから離婚しているが、ジョセフィーヌはヴァージルの死の数ヵ月後に死亡している。ウエイドが祖父母に育てられたのはそのような事情からであった。ヴァージルは、1967 年 9 月初めにミラー近郊のテックス・フルトン農場 (Shirley “Tex” Fulton Farm) で働き始めた。5 週間サイロの仕事をし、その間はフルトン家の母屋の二階で、テックスの三人の息子たちと一緒に暮らしていたが、後に農場内の南の方にある別棟に移った。テックスはヴァージルに厚い信頼を寄せていたに違いない。そうでなければ、幼い息子たちの身近に住ませるようなことはするはずがない。事実、祖父母の農場に住んでいた頃のヴァージルを知るラリー・アボグハスト (Larry Aboghost) は、「とても良い子でしたよ。」と話し、見た目はどんなかという問いに、「ハンサムで茶色の目、薄茶色の髪、強固な体格で、背が高く、働きもの (handsome, brown eyes, sandy brown hair, physically powerful, tall, hardworking)」と答えた。<sup>(16)</sup>

## 2.3 マリリン・フィリップス

### 2.3.1) インディアンとしての誕生

1938 年 7 月 16 日、マリリン・イヴオンヌ・ファイアー (Marilyn Yvonne Fire) は、父：チョンシー・ファイアー (Chauncy Fire, 29 歳、Red=インディアン)、母：ハーメイン・クラークス (Hermine Clerks, 27 歳、Red=インディアン)<sup>(17)</sup>の次女としてフォート・トンプスンで誕生した。

1956 年、サイラス・ローズ・ジェロー (Silas Rose Gerreau, スーインディアン) と結婚し、娘ロンディーナ (Rondina) が生まれたが、数年で離婚。1965 年 6 月 8 日、リチャード・フィリップス (Richard Y. Phillips, 白人) と結婚した。

### 2.3.2) ヴァージルとの出会い

ヴァージルとマリリンは、1967 年 12 月 24 日にチェンバレン (Chamberlain, SD) の酒場で出会った。その時の様子を、彼女は法廷で次のように説明している。<sup>(18)</sup> ミズーリ州に行こうとミッチェル (Mitchell, SD) 行きのバスを待つ時間、酒場でヴァージルが声をかけてきたので一緒に飲んだ。彼と一緒に来て料理や洗濯をして欲しいというのでついていくことにして、そのままミラーに来た。(568) そ

して彼女は、ヴァージルの母方の叔父アーロン・アシュレー (Aaron Ashley) とヴァージルとともに、ミラー近郊のテックス・フルトン農場で暮らし始めた。三人はよくミラーの町に出て行つては酒場で酒を飲んでいた。

### 2.3.3) ヴァージルとマリリン

マリリンは、ヴァージルと出会って 5 カ月あまり経った 1968 年 5 月 15 日、フィリップスとの離婚の申し立てのため、ミラーの弁護士ロン・キャメル (Ron Campbell) の事務所を訪れた。キャメルによれば、ヴァージルはマリリンが他の男性と言葉を交わしたりするとひどく嫉妬した。たとえばマリリンが町に一人で出かけて行って酒を飲み、戻ってからヴァージルに他の男のことを話すと、ヴァージルに殴られるということはよくあったようだという。そしてマリリンを評して「あんなことさえなければ魅力的な女性だった。(She was an attractive person if she weren't so screwed up.)」と語った。<sup>(19)</sup> 以下はキャメルが 1969 年 5 月 5 日、法廷で証言した内容である。(ハイドプリームは、この関係を理由に、裁判ではキャメルを検察官から外すよう要求し、認められている。)

5 月 15 日にマリリンはヴァージルと一緒に離婚の申し立ての依頼に事務所に来てきた。しかし 7 月 8 日に再び来て離婚の申し立てを取り下げるといふ。理由はヴァージルと喧嘩だか仲たがいをしてさんざん殴られたからで、その時のマリリンの顔には、明らかに何かに打たれた青や黒の痣があった。8 月 23 日、再びマリリンが連絡をしてきて離婚申し立てを続けて欲しいと言ひ、30 日にはテックス・フルトンからマリリンが、大事な馬具のサドルを積んだまま勝手に農場の車に乗って行ってしまったのでサドルを返してもらって欲しいと言ってきた。同じ頃に、ヴァージルからも同様の訴えがあり、9 月 18 日、ウイスコンシン州にいるマリリンの姉のシルヴィア・レッド・デイ (Sylvia Red Day) に手紙を出して、マリリンの居場所を知っているなら連絡をしてサドルを返すように伝えて欲しいと頼んだ。9 月 26 日、マリリンがシルヴィアのところから連絡を寄こした。何とかして欲しいと言われたが、自分は州検事の選挙を控えていたため刑事事件には関われないと答えると、自分で何とかして車とサドルは返すと言っていた。マリリンは自分の居場所をヴァージルに知られたくないと言った。数日後、9 月 26 日付の手紙を

マリリンから受け取った。そこには姉のシルヴィアと住んでいて近くのガソリンスタンドで働いており、車もサドルも最高の状態だと書いてあった。1968年10月4日、マリリンがヴァージルと事務所に現れ、何もかも元通りに戻ったので、離婚申し立ての手続きを続けて欲しいと言ってきた。(4・7)

次にマリリンと関わりを持ったのは12月11日にハンドカウンティ郡の保安官ブルース・ハメル (Bruce Hammill) から電話があつて、マリリンがヴァージルを撃ったのでロン・キャメルに来て欲しいと言っていると伝えられた時だった。11月5日の選挙で勝って1969年1月から州検事に就任することになっていたので、ハーブ・ハイドプリームにその旨を連絡した。それからハーブと郡庁に隣接する拘置所に行ってマリリンにハーブを紹介した。(8)



図1 拘置所に到着したばかりのマリリンと州刑事局特別捜査官のジェリー・リンドバーグ

1968年12月11日の早朝、マリリンは眠っているヴァージルを射殺した。1969年5月5日にミラーの裁判所で陪審員候補者が集められ、翌々日から陪審員裁判が始まった。そして1969年5月10日、マリリンに無罪の評決が下った。

### 2.3.4) その後のマリリン・フィリップス

1992年8月19日(水)付 *Argus Leader* (Sioux Falls, SD)の死亡記事欄には彼女の人生が次のようにまとめられている。「マリリン・レッド・ウィング (Marilyn Red Wing) 1992年8月16日 Sioux Valley 病院にて死去。フォート・トンプスンで生まれ、育ち、学校教育を受けた。サウスダコタ州の様々な場所で暮らし、1972年にスーフォールズにきた。主婦。

残された家族は娘ロンディーナ・エガート (Rondina Egert、ミネソタ州ミネアポリス)、姉妹アーリン・オーキー (Arlene Oakie、サウスダコタ州パインリッジ) とシルヴィア・キンケイド (Sylvia

Kincaid、アーカンソー州)

礼拝は木曜日午前10時クロウ・クリークのセントジョン米国聖公会 (St. John's Episcopal Church)、続いて同教会墓地に埋葬の予定。

弔問は本日午前9時から正午までミラー斎場 (Miller Funeral Home)、正午から午後7時までクロウ・クリークの教会。通夜式は同教会。」

## 3 ヴァージル・アイキンズ射殺事件概要

### 3.1 ハイドプリームの弁護人就任

1968年12月11日、マリリンは同居していたヴァージル・アイキンズを就寝中に射殺した。彼女自身からの通報を受けた郡保安官ハメルは、弁護士のロン・キャメルに連絡したが、ロンは前述の理由で弁護人にはなれないため、地元の弁護士ハイドプリームにその役割を委任した。ハイドプリームは自宅の向かいにある郡拘置所に行き、マリリンと面会した。

ハイドプリームとともに弁護人として法廷に立ったディック・ジグラー (Dick Ziegler) は、1968年6月にロースクールを出てハイドプリームの弁護士事務所に入ったばかりの弱冠24歳で、この事件に関わることになった。45年前を振り返って彼は、「あの法廷のことは今でも鮮明に覚えている。多くの弁護士と仕事をしてきたが、ハーブは、これまでに会った中で最高の弁護士だった。あの事件は確かに全米で初めてのバーニングベッド<sup>(20)</sup>の判例だった。」と語っている。<sup>(21)</sup>そこで、サウスダコタ州対マリリン・フィリップスの裁判記録から、事件の概要をみる。

### 3.2 ヴァージル・アイキンズ射殺事件当夜

マリリンとヴァージル、ヴァージルの叔父アーロン・アシュレーの三人は、ミラーから南南西に4-5マイル離れたテックス・フルトン農場の農場主テックス所有の家で同居していた。ヴァージルとアーロンは、テックスの農場の仕事をしていた。

1968年12月10日、仕事を終えた後、三人は夕食を済ませて町に出かけることにした。ミラーのバー、ハイライト (Hi-Light) でビールを飲んで閉店まで2-4時間過ごしたあと、さらに別のバーに行ってビールを飲んだ。マリリンとヴァージルは口論となり、マリリンは家に帰ることを渋ったが、三人は車でフルトン農場の家に戻った。12月11日三人

は家でコーヒーを飲み、マリリンは着替えてキッチンに戻るとヴァージルを激しく非難し始めた。ヴァージルはマリリンを殴った。

就寝後、マリリンは鹿撃用の.303ライフル銃を持ち出し、ベッドで眠っているヴァージルを射殺した。午前4時、マリリンは農場主のテックスに電話をし、「ヴァージルを撃ったわ。彼の脳みそを吹き飛ばしたの。(I shot Virgil. I blew his brains out.)」と伝え、テックスは保安官ブルース・ハミルを呼んだ。マリリンはハンドカウンティ郡拘置所に勾留された。1968年12月19日の地元紙 *The Miller Press* は、予審が翌年1月27日に決まったことを伝え、フィリップス夫人(マリリン)が法廷に召喚され、パーク判事(Judge Paul F. Burke)の前で殺人の罪状認否手続きを終えたこと、弁護人はハーブ・ハイドプリーム、検察官は1月の宣誓就任式までは現州検事のジェームズ・ヘア(James Hare)、宣誓就任式後はロン・キャメルが担当することを伝えた。

## 4 全米初のDV裁判

### 4.1 陪審員の選出

訴訟手続きは、第9巡回裁判所担当判事のジョン・フォーシャム(Jon Fosheim)によって行われたが、何かの事情で変更があり、裁判は、後にサウスダコタ州最高裁首席判事になるジョージ・ウィースト(George W. Wuest)<sup>(22)</sup>のもと、ミラーのハンドカウンティ郡庁舎内の法廷で行われた。

1969年5月5日、12人の陪審員と予備の陪審員1人の選出手続きが開始された。全部で784頁にわたる裁判記録のうち、ほぼ半分に近い332頁までが陪審の選出に充てられ、7日午前10時45分まで長い時間がかけられている。12人の陪審員は全員が白人で、うち10人が男性であった。選出にあたってはマリリンがインディアン女性であることから、イ



図2 ハンドカウンティ郡庁舎内 裁判所の陪審席

ンディアンに対する偏見と死刑についての態度が問題になった。刑事事件であるため、12人の陪審員全員一致の評決が求められた。

### 4.2 検察側と弁護側

検察側は、州庁ピア(Pierre)からやってきたサウスダコタ州司法長官補佐のジム・ジーサー(R. James Zieser)、弁護側は、サウスダコタ州ミラーの弁護士ハーブ・ハイドプリームとリチャード・ジーグラー(Richard Ziegler; Heidepriem, Widmayer & Ziegler, Attorneys at Law, Miller, SD)の二人であった。

検察の起訴理由は、マリリン・フィリップスは謀殺を行った。この謀殺は、計画的な冷血殺人であったというものである。

一方弁護人側は、ヴァージルが.303ライフルでマリリンに撃たれて死んだことと、この事件がミラーの南のテックス・フルトン農場で起こったことは事実として認めたとうえで、この事件は彼女の正当防衛であるとして、マリリンの無罪を主張した。

当時の常識では、無防備な状態でベッドに横たわっているヴァージルが眠っていることを確認した上で、別の部屋にライフル銃を取りに行き、その頭を吹き飛ばしたマリリンに正当防衛が認められるはずはなかった。

### 4.3 裁判の流れ

裁判は、1969年5月7日午前11時7分に始まった。次々に証人が登場し、供述と尋問が繰り返されて、事件の概要が明らかになっていく。5月9日午後3時47分にすべての証拠が出揃った。(333-694)陪審が退席し、午後4時から、判事から陪審に対して翌日行う説示34点についての打ち合わせが検察、弁護人と判事によって行われた。(695-707)

裁判最終日は、1969年5月10日午前9時に始まった。ウィースト判事が、マリリンが殺人罪で起訴された理由を簡潔に述べ、次に弁護側の無罪主張について触れ、立証されない限り彼女は無罪であると述べる。そして陪審に対し、立証責任は検察側にあること、この裁判において検察側が立証すべきことは何かなど、陪審が評決を出すための審議に必要な、この事件の法律問題を説明する。(708-726)

### 4.4 ハイドプリームの「正当防衛」の主張

検察側のジーサー司法長官補佐による弁論

(727-746) のあと、20 分の休憩を取って、5 月 10 日午前 10 時 30 分、弁護士ハイドプリームが最終弁論を開始した。

陪審員にわかりやすいことばで、裁判の流れを説明し、このような気の進まない仕事に犠牲を払ってくれたことに対して謝意を述べる。そして、「疑わしきは罰せず」(748) という法律の基本原則に触れて、全員が移民の子孫である陪審に次のように訴えた。「祖国を捨ててこの国にやってきた人々は、祖国の抑圧を逃れて来た人々です。彼らは保護を求めました。彼らは、有罪判決を受けて初めて有罪となるのであり、無実の人を有罪にするよりは、何人かの有罪の人が自由でいる方がましだと達観していました。…たとえ州が弁護士側よりも多くの証拠物件を提出したとしても、状況証拠を超えて立証することができなければ彼女を有罪にすることはできません。100%とは言いませんが、とんでもなく確信できるのでなければならないのです。」(749)

ハイドプリームは最初に、マリリン・フィリップスがヴァージル・アイキンズを射殺したことをあっさり認めた。次に、この殺人が計画的な殺人であったことについての州の立証は、状況証拠を超える証明になっていないと訴えた。そして彼の弁論は核心部分に入った。「マリリン・フィリップスは、正当な理由で彼を殺したと言っています。正当防衛だった。…陪審は被告人を完全に無罪にするべきだと私は考えています。」(752)

サウスダコタ州法には、身の危険を察知するのに十分な理由があり、差し迫った危険がある場合には正当防衛としての殺人が認められていることを説明し、マリリンにはそれだけの「理由」と「差し迫った危険」があったのだと言う。(753-758) そして、彼女の足の傷や打撲の痕を示す証拠写真に陪審の注意を向ける。マリリンは常時ヴァージルから暴力を受けていた。そしてその夜、彼女は大きな身の危険を感じた。「だから、彼女は銃を持ち、ヴァージル・アイキンズを撃ったのです。」(758)

殺さなくても膝かどかかを撃っておけばよかつたのではないかという検察に反論して、「それでは怒り狂った熊が彼女を襲って、マリリン・フィリップスは一巻の終わりです。」(757) サウスダコタ州は、彼女が正当防衛ではなかったことを、状況証拠を超えて示さなければならないのに、これを十分に立証していないばかりか、この点に関して一つの証拠もない。従って、陪審の評決はマリリン・フィリップス

を無罪にしなければならないと主張する。

これに加えて、なぜ彼女はあそこから出ていかなかったのか、という疑問に反論する。「彼女はそこで何をしていたのか…。まず、彼女は彼のことを愛していたと言いました。心情的な愛慕があったとしても、生命の危機があれば、彼女は何とかしてあの家から出て行くべきでした。ジーサー氏やあなたがた、私を含めて中流階級の白人であれば、誰でもそうしたでしょう。しかし、彼女に関しては出身部族の文化を考慮にいれなければなりません。彼女が育った文化ではそうはならないのです。そして第三に彼女は失敗に終わったものの、そこから出て行く努力をしたと言えます。彼女は何度も出て行き、毎回帰ってきました。彼は彼女を説得して帰って来させることができました。私が思うに、多分彼女は次は良くなるだろうと思ったかもしれませんが。彼女が証言した中で、1 月に二人とも酒をやめようと決めて、7 月 4 日までの半年間飲まずに過ごした話を思い出してください。彼女はそのまま頑張れば大丈夫、この男とずっと一緒にいれば状況は変わっていくだろうと考えたのでしょうか。多くの女性はきっとよくなると思ってじっと待つのではないのでしょうか。多分それが答です。

もう一つの答は、こういうことかもしれません。彼女の証言によれば、ヴァージル・アイキンズはこう言いました。『もしも俺から離れたら殺す』とか『他の奴と一緒にいたら殺す』と。それで彼女は出て行かなかったのかもしれませんが。まとめると、彼女はこの大柄で強く、力があって誘導的な男から『お前はここにいて何があってもここにいるのだ』と言われ続けてきました。問題の夜、彼女は危険を察知しました。ヴァージルが酔っていて彼女はバーにいました。彼女はレス・ウィンゼルのところに行って 10 ドル借りられないかと頼みました。町で泊まるためです。私たちは、彼女にはもっと他にもできることがあったのではないかと言うでしょう。留置場に逃げ込むとか、飛び出すとか、通りを走って誰かの家に逃げ込むとか。でも、彼女はこんなことが起こるとは知らなかったのです。起こるかもしれないと感じてはいましたが。電話をしなかった理由にも触れておきたいと思います。彼女が電話まで行った途端に、男が猫のように飛び起きて、彼女をつかんで床に叩きつけたかもしれません。彼女はこういう状況に直面していたのです。」(759-760)

#### 4.5 極悪非道のヴァージル・アイキンス

ハイドプリームは最後にヴァージルの前科について話し始めた。ヴァージルを「狂暴で、荒れ狂った、残忍な男」(765)と評し、占領時代の北海道札幌市で死刑判決を受けた軍事裁判の記録を読み上げた。(755-756)

軍事裁判検討委員会の報告書<sup>(23)</sup>に記載の被告人二人の調書の内容には、「1948年11月25日の午後2時から3時頃、ヴァージルとシーヴァース(Harold Seevers)の二人は、札幌市内のE.M. Clubで酒を飲み、マリファナを吸っていた。酔いが回ったころ、少し外に出て日本人から金を巻き上げようということになり、午後6時頃に外に出たあと犯行に及んだ」とある。

この犯行には、13人の被害者がいた。農林省林野庁札幌営林局勤務の5名、北海道帝国大学医学部医師1名、同学生2名、一般人5名である。ハイドプリームはそれぞれの被害者について被害の状況をすべて読み上げた。紙面の都合上、要約すると次の内容である。

営林局の5名は、仕事から帰ったところで、エンストしたトラックを車庫に入れるため牽引作業中に襲われた。下武雄は射殺され、菅原眞二、高橋静夫、佐々木茂の3名はピストルで殴られ、八木橋正光は撃たれて殴られるという、暴行を受けた。

北海道帝国大学構内では大学関係者3名が襲われた。岸本三郎医師は、後に医学部教授になったが、頭を殴られた時に右目の視力を失った。「味覚がなくなりました。」と語っておられたと、同じ夜に襲われて640円を奪われた物理学教室の大学院生であった鮫島淳一郎は、当時を振り返った。<sup>(24)</sup>北大生の溝江宗武は射殺された。

ほかの5名は、230円と札入れとライターを奪われたフルタハジメ、自転車を倒されて暴行されたハセガワキヨシ、650円を奪われて暴行されたオガタミツオ、ピストルで右目を撃たれて強盗されたクロカワゼンキチ、ライター他を奪われたホンゴウタケシである。

#### 4.6 自業自得のヴァージル・アイキンス

こうして、人間の命に対して敬意を払わなかったヴァージルは、「剣によって生き、剣によって死んだのだ」と、ハイドプリームはヴァージルがいかにも恐ろしい男であったかを繰り返して説いた。小柄なマリリンが、体重200ポンド(約90kg)、身長6フィ

ト2インチ(約188cm)のこの大男に、力いっぱい顔面を殴られ、車に頭を叩きつけられて、引きずられて、道路に叩きつけられた。ヴァージル・アイキンスとは、そういう残酷な男だったのだと。

そしてこう結んだ。「ご存知の通り、皆さんは裁判所から呼び出された80人から選ばれた12人の方々です。検察側と弁護士側の両者が皆さんを選びました。それは、皆さんがこの裁判で適切な評決を下されるだろうと私たちが確信したからです。ですから、皆さんを信じてあとは皆さんにお任せします。」(770)

#### 4.7 評決

検察側のジーサーが最後にマリリンの有罪を訴える弁論を終えて、12人の陪審員は陪審員室へと導かれた。1969年5月10日午前11時35分であった。

5月10日午後6時、被告人、弁護士、検察の全員が着席したことを確認して、ウィースト判事が陪審を法廷に呼び入れ、着席させた。陪審長のジャック・ダックスベリー(Jack Duxberry)が立ちあがり「無罪」の評決を宣言した。裁判は、午後6時3分に終了した。

### 5 終わりに

人と人との出会いは偶然であって、実は必然であるのかもしれない。ハーブ・ハイドプリームとヴァージル・アイキンスの出会いは、1949年の初夏のある日、ヴァージルの母親が事務所に持ってきた息子の死刑判決の減刑を求める嘆願書の署名であった。それから20年後の1969年5月、ハイドプリームは、ヴァージルを射殺したマリリン・フィリップスの弁護士として、彼が死んで当然の残酷で無慈悲な男であったと陪審を説得した。

筆者が初めてハーブ・ハイドプリームに出会ったのは、1975年7月のことで、今にして思えば、それもまた必然の出会いであったのかもしれない。その縁で、2007年から彼の息子スコット・ハイドプリームが上院議員を務めるサウスダコタ州議会で数年間、州政治に関する研究が可能となった。

次には、スコット・ハイドプリームが日本を訪れ、父親の物語を書きたいので札幌でヴァージルが起こした事件のことを調査して欲しいと依頼があった。軍事裁判に登場する人たちや場所、当時の風景や風俗について調査するうちには、多くの人たちの悲し



みと幸せにも遭遇した。特に、忌まわしい出来事であったにもかかわらず、快くインタビューに応じて当時のことを語ってくださった被害者の一人で世界的な植物学者の鮫島淳一郎先生には、心から感謝している。

調査の過程で、ヴァージルの減刑を実現したのが日本人女性からの嘆願であったらしいことが分かってきた。彼女がヴァージルの母親ヴィクトリアと文通していたことも、服役中のウエイドが教えてくれた。この女性が日本で幸せな晩年を送ったことも出会った人から知らされた。

本稿は、ハーブ・ハイドプリームの物語の序章である。アメリカ社会のほんの一部を切り取った研究ノートに過ぎないが、そこには合衆国のインディアン問題、戦後札幌の占領軍、異人種間結婚の壁、陪審員制度など、様々なアメリカの姿を垣間見ることができる。その一つひとつをより深く掘り下げて、ハーブ・ハイドプリームの物語をアメリカの物語としていつか書いてみたい。占領時代の札幌を知る人たちの多くがすでに泉下の客となつたいま、生きた証言も資料の入手も困難になるばかりである。各方面からのご教示、ご助言をいただければ幸いである。

## 謝辞

ハーブ・ハイドプリームは、1982年6月に来日した折に、南山大学外国語学部英米科の岩野一郎教授のゼミに招かれて学生たちを相手に話をする機会を得た。スコット・ハイドプリームもまた2007年8月に来日した折に、名古屋アメリカ研究会の招きで、南山大学でサウスダコタ州政治について講演を行った。筆者のこの研究も、岩野先生の存在なくしては始まることがなかった。30年を超えてもなお助言を惜しまない師に、この場を借りて感謝申し上げたい。

## 注

- (1) *Los Angeles Times* (1949年4月27日)は、次のように報道している。「北海道札幌4月26日(AP)―二人のアメリカ軍兵士が二人の日本人を殺害し、死刑判決が下された。この二人の兵士は、Pfc. Virgil L. Aikens (21)―Highmore, SD―と、CPL. Harold F. Seevers (21)―Wade, OH―である。」
- (2) 資料の入手については、ハーブ・ハイドプリームの次男であり、現在サウスダコタ州スーフォールズで法廷弁護士として活躍する元州上院議員スコット・ハイドプリーム氏 (Scott Heidepriem) と、名古屋アメリカンセンターのライ

ブラリアン大鍋千香子氏に大変お世話になった。

(3) 筆者の渡米に合わせて関係者のインタビューを設定し、同席を許してくれたスコット・ハイドプリーム氏には特にお世話になった。サウスダコタ州スーフォールズの州刑務所での、ヴァージルの息子ウエイド・アイキンズ氏との面会、ヴァージルの射殺から6ヵ月後に開かれたマリリン・フィリップスの裁判で陪審員を務めた一人、ラリー・アバギヤスト氏 (Larry Arbogast) を訪問してのインタビュー、この裁判でハーブ・ハイドプリームとともにマリリンの弁護を行ったディック・ジグラー氏 (Dick Ziegler) およびマリリンとヴァージルを直接知るロン・キャメル氏 (Ron Campbell) との電話インタビューは、彼の存在なくしては実現しなかった。現在スコットはハーブ・ハイドプリームについての本を執筆中と聞く。この本の一日も早い出版が望まれる。

(4) South Dakota Department of Finance, *South Dakota Legislative Manual 1969*

(5) 1492年、コロンブスが新大陸に到達した頃、そこにはすでにインディアンの暮らしがあった。土地所有の概念を持たない彼らを白人入植者たちは蹴散らし、土地を自分のものにしていった。合衆国政府とインディアン諸部族との間で交わされた移住条約は、インディアンが住む豊かな土地を奪って白人自営農民に土地を提供し、合衆国の国土を拡大していった。こうして合衆国政府が「文明人」の住むにあたいしない西部の荒地にインディアンを追いやっていった歴史については、藤永茂『アメリカ・インディアン悲史』(朝日新聞社 1974年、2004年)に詳しい。サウスダコタ州にある9つのインディアン保留区は、これ以上どこへもインディアンを追いやることができなくなった合衆国政府が彼らに与えた「白人が最も欲しがらなかった土地」であったと言える。

(6) Eric Heidepriem, "The Heidepriem Story As of April 1, 1971" スコット・ハイドプリーム所蔵、A4用紙13枚のタイプ原稿。

(7) Herbert Heidepriem, "Autobiography of Herbert Heidepriem" スコット・ハイドプリーム所蔵、A4用紙10枚のタイプ原稿。

(8) この年、彼の選挙区から州上院議員に選ばれたのは、後にクナイブ知事 (Gov. Dick Kneip) の副知事となり、クナイブ知事の辞任に伴って知事となる、民主党のハーヴィー・ウールマン (Harvey Woolman) であった。

(9) Buffalo County Register of Deeds (Gann Valley, SD) 保管の1928年出生記録。2014年2月12日訪問して確認。

(10) 1962年12月24日誕生、母はインディアンのジョセフィーヌ・バッド・モカシン (Josephine Bad Moccasin)。ウエイドは、1985年5月2日、ハイウェイパトロールの警官オレン・ヒンドマン (Oren S. Hindman) を殺した罪で終身刑を言い渡され、現在服役中。State v. Wade Aikins, CR. #85-318

(11) 2014年2月8日(土)、スーフォールズのサウスダコタ州刑務所にてスコット・ハイドプリームとともにインタビュー。

(12) この母子について詳しく述べることは差し控える。

(13) Department of the Army Office of the Judge Advocate General, *Board of Review and Judicial Council: Holdings, Opinions and Reviews Vol. 5 CSJAGK-CM337082, GCMO27, April 25, 1950, pp. 331-393*

(14) ミズーリ州インディペンダンス (Independence, MO) にあるトルーマン・ライブラリー (Harry S. Truman Library & Museum) には、大統領に宛てられたすべての手紙を保管する部門があり、問い合わせたが、文書館員の David Clark からヴィクトリア・アイキンズからの嘆願書は見つからないとの返答であった。

(15) トルーマン大統領は 1950 年以降に軍事裁判で有罪となった戦争犯罪者に対し包括的な二つの恩赦—Proclamation 3000 と Proclamation 3001—を交付しているが、そのどちらも交付の日付は 1952 年 12 月 25 日であり、ヴァージルの恩赦はこれにあたらぬ。

北海道新聞編集部報道センターの井上雄一記者に提供していただいた次の外務省の資料からは、軍事裁判記録に記載のヴァージル・アイキンズとハロルド・シーヴァースの「日本人妻」と思われる二人の女性が、彼らの減刑に大きく貢献したらしいことが分かる。当時、日本人女性と米兵の結婚は認められていなかったため、合法的な結婚ではなかったが、米兵との関係を問われて、ヴァージルの「妻」は札幌市内の神社で結婚式をあげたと証言している。

「(7) 米兵の非行に関する陳情その他の措置振りに関する件最近当地民事部係官は、日本人より提出の米兵の非行に関する陳情に接し、従来米側で直接受理した場合は適宜米側で処理していた趣きのところ、今後は原則として当事務局経由各陳情者より米軍当局に提出するよう指導しており、当事務局において最近二件の日本婦人より米兵との関係による陳情を受け付け、その措置について米軍当局よりの公式の回答に接した。」(昭和二十五年四月六日付)

続けて同報に、次の記載があり、減刑の確定が記されている。

「(9) 米兵の日本人傷害事件の刑の減刑

一昨年十一月二十五日感謝祭当日米兵により日本人二名が札幌市内にて殺害せられ、当局半月報第二九号既報の通り加害者ハロルド・シーヴァース伍長、ヴァージル・アイケンズ一等兵は昨年四月軍事法廷で死刑を宣告されたが本月二十五日トルーマン大統領は米陸軍法務局の勧告に基き兩名の刑を終身禁固に減刑した趣、新聞に報道があった。(ワシントン二十五日—AP 共同)」

北海道連絡調整事務局長・林馨より、外務大臣・吉田茂宛の執務月報第五十一号 (4 月 1 日～31 日)

(16) 2014 年 2 月 12 日、アバギャストの自動車修理工場にてスコット・ハイドブリームとともにインタビュー。

(17) Buffalo County Register of Deeds (Gann Valley, SD) 保管の 1938 年出生記録。2014 年 2 月 12 日訪問して確認。

(18) State of South Dakota, Plaintiff vs. Marilyn Phillips, Defendant, Trial Script, Cir. Crim. 69-01 789 ページに及ぶこの裁判記録は、スコット・ハイドブリームから資料の提供を受けた。これ以後、カッコ内の数字は、この裁判記録の頁を表す。

(19) 2014 年 2 月 14 日、スコット・ハイドブリームとともに、スーフォールズのハイドブリーム法律事務所 (Johnson, Heidepriem&Abdallah,LLP) にて電話インタビュー。キャメルは、1960 年にロースクールを終えて、スーフォールズの法律事務所です 1 年間働いたあと、ミラーで自分の事務所を持って弁護士をしていた。後にミラーの Heidepriem, Widmayer & Campbell, Attorneys at Law でハイドブリームのパートナーとなった。

(20) 1977 年 3 月 9 日、ミシガン州ダズヴィル (Dansville, MI) で、夫 (後に離婚) の 12 年間にわたる DV に耐えかねた女性 Francine Hughes が、命の危険を感じた夜、彼が眠るのを待って四人の子どもたちを連れ出した後、彼のベッドの周りにガソリンをまいて火をつけ、焼死させた。陪審は、それを一時的な錯乱によるものとして彼女に無罪の評決を言い渡した。この話をもとに、ファラ・フォーセットが主演した映画 *The Burning Bed* によりバーニングベッドの判例として世間に知られるようになった。

<http://archive.lansingstatejournal.com/article/99999999/NEWS01/909270304/Burning-Bed-turning-point-fight-against-domestic-violence> 2014 年 12 月 1 日最終アクセス

(21) 2014 年 2 月 14 日、スコット・ハイドブリームとともにハイドブリーム法律事務所です電話インタビュー。現在はカリフォルニア州在住。

(22) 1924 年 2 月 3 日生まれ、第 4 巡回裁判所判事 (1965 年—1984 年)、州最高裁判事 (1984—1994)、同首席判事 (1986 年—1990 年)。スコット・ハイドブリームによれば、マリリンのあざの写真など、DV の痕を証拠品として採用したのは当時の裁判所としては画期的であった。ウィーストが退職後、スコットは彼に、マリリンが暴力を受けていたことを示す写真を証拠品としてなぜ採用したかを問うインタビューをしている。その時の答は、「もし証拠として採用しなければ、君の父親が、後になって、そのせいで裁判に負けたと言ってくるだろう。もし証拠として採用したとしても、ハーブはどうせ裁判には負けるのだから、と思ったので採用を許可した。」というものであった。陪審は、裁判長も想定しなかった評決を下したわけである。

(23) 裁判記録の全文はスコット・ハイドブリームから入手。

UNITED STATES v. Recruit VIRGIL L.

AIKINS(RA37894501), Company A, 187th Glider Infantry Regiment, and Corporal HAROLD F. SEEVERS

(RA45030260), Company B, 187th Glider Infantry Regiment, (Trial by G.C.M., Convened at Sapporo,

Hokkaido, Japan, 19-26 April 1949), EACH: Death この

一部は、以下のサイトでも見ることができる。

[http://books.google.com/books?id=6j2gO6svD9EC&pg=PT344&lpg=PT344&dq=virgil+aikins,+sapporo&source=bl&ots=zW7W4GhPf6&sig=Qd3FlUuOG5AW31Dd1RQEjCEloXU&hl=en&ei=Xc1cTf6sI4nUtQPdsvTOCg&sa=X&oi=book\\_result&ct=result&resnum=1&ved=0CBUQ6AEWAA#v=onepage&q=virgil%20aikins%2C%20sapporo&f=false](http://books.google.com/books?id=6j2gO6svD9EC&pg=PT344&lpg=PT344&dq=virgil+aikins,+sapporo&source=bl&ots=zW7W4GhPf6&sig=Qd3FlUuOG5AW31Dd1RQEjCEloXU&hl=en&ei=Xc1cTf6sI4nUtQPdsvTOCg&sa=X&oi=book_result&ct=result&resnum=1&ved=0CBUQ6AEWAA#v=onepage&q=virgil%20aikins%2C%20sapporo&f=false) (2014 年 11 月 24 日最終アクセス)

(24) 2007 年 11 月 12 日札幌市内グランドホテルにてインタビュー

(原稿受理年月日 2014 年 12 月 1 日)